

茂才が答える前に致庸が微笑むと進み出た。

「そのようなことはなさいません。大人は大清国の宗室、国の重臣でいらつしやいます。むろん国家のために学問を敬い重んじる道理を体得なさっておいでのことでしょう。天下の秀才が意気高く試験に臨む貢院の前で、生員に跪けなどと無理強いなさるはずがございません」  
いささか鼻白んだ哈芬は、振り返って胡沅浦がうっすらと笑っているのに気づき、思わず口調を和らげた。

「胡大人、ご覧下さい、これがわれわれ山西の秀才でございます！ わたくしの言葉が信じられないのでしたら、どうかご自分でご下問なさってください」

胡沅浦が致庸と茂才を見やると、全員の視線が二人に集中した。陸大可は興味津々で致庸を眺め、振り返って何か言おうとしたが、娘が馬車から身を乗り出して気をもんでいるのを見て思わずと胸をつかれた。雪瑛は怖くてたまらない。

「長栓、ど、どうしたらいいの？」

震える声で低く尋ねると、長栓もハラハラしながら小声でつぶやいた。

「もうお終いです。やっぱり大旦那様は先見の明があたりだったんです。太原府に着いたら軽はずみなことはするんじゃないって、あんなに仰ったのに、やっぱり若旦那様は悪い癖が出てしまつた！」

胡沅浦は致庸と茂才をじろじろと眺めていたが、その目に次第にさげすみの色を浮かべ、胡叔純に向かつて言った。

「この者たちに出身地と名前を尋ねよ」

胡叔純は命じられるままに尋ねた。

「さつきと勅命大臣のご下問にお答えしろ！」

致庸は驕らず卑下せず言った。

「お答え申し上げます。わたくしは喬致庸と申します。太原府祁県喬家堡の人間でございます。茂才もまた落ち着いて簡潔に答えた。

「わたくしは孫茂才と申します」

哈芬は胡沅浦に言った。

「大人、この祁県喬家堡というのは山西の祁、太、平の三県にあつて最も裕福とは言えぬまでも、包頭に十数カ所店を持ち、太原、北京、天津でも商いをいたしております。やはり大富豪と申してよろしいでしょう」

哈芬は致庸を振り返った。

「おまえが祁県喬家堡の人間なら、当地の喬姓の大商人と縁戚関係があるのか？」

致庸は顔色も変えずに言った。

「大臣、わたくしと喬家に縁戚関係はございません。わたくしは貧しい家の生まれで、仰せの喬家とは別の喬家でございます」

「わかつておる。おまえが喬家の人間なら、むろんここに試験を受けになど来ておらぬだろうからな」

哈芬は冷ややかに笑うと、振り返って胡沅浦に言った。

「大人、三年に一度の郷試に於いて、太原府では毎回祁県に五人の定員を割り当てておるのです。

ほかの県では、生員はみな銀子を使い、縁故を頼り、頭をしぼって一名の定員を争うものです。が、しかし祁県、太谷、平遙の三県の県知事に限り事情が異なるのです。当該三県の県知事は、案内状を出して試験を受けに来てくださいと頼まねばならぬのです。さもないと人数が不足になるからです。そうまでしても定員に達するとは限りません。山西の人間は昔から営利に聡く、商売を重んじて官を軽んじます。つまりこの商売重視の風潮が山西の民風を腐敗させているのです。まったく金輪際治し方がありません！」

致庸はこれに腹を立て、進み出て論駁しようとしたが茂才に止められた。胡沅浦は眉をひそめて致庸を見やった。

「そなたまだ言いたいことがあるのか？」

致庸は深く息を吸い込んで自分を押しさえた。

「ございません。わたくしは今日は郷試を受けに参ったのです。話をしに来たではありません」

胡沅浦はじつとかれらを見つめると背を向けて命じた。

「二人とも入れてやれ！」

哈芬は仕方なく手を振ると、胡沅浦の後について戻って行った。龍門の外の野次馬たちは大いに拍手喝采をした。

指揮官が致庸に怒鳴った。

「勅命大臣様が入ってよいと仰っているのに、なにをぐずぐずしておる？」

続いて茂才に向かつて言った。

「おまえ、着ている物を脱げ。身体検査をする！」

茂才が服を脱ぎ始めると致庸は龍門に入って行ったが、こらえきれず胡沅浦を顧みて大声で言った。

「大人——」

胡沅浦は驚いて振り返った。

「大人、もしわたくしが言いたいことがあると言ったら、聞いてくださいますか？」

陸大可ら土地の有力者たちも、これにはおもわず振り返った。馬車の中の玉菡も下ろしていた窓布を再びサツと引き開けた。野次馬たちの間にざわめきが走り、雪瑛はぎゅっと目を閉じ、長栓は尻に火がついたかのように足を踏みならした。

「せっかく中に入れてもらったのに、今度は何なんだよっ？」

「生意気な！」

哈芬は致庸を大声で叱りつけたが、胡沅浦は振り返った。

「よかろう！ 喬致庸、ここ貢院は国のために人材を選ぶ場所でおまえは秀才だ。話があるなら何なりと話すがよい。話してくれ、腹を割って話してくれ！」

致庸は拱手した。

「胡大人、さきほど哈大人が員数合わせのために県知事がかき集めたのだろうと仰った時、わたくしは反論いたしませんでした。ですがわたくしが員数合わせなのかどうかは、三回の郷試が終わった後、わたくしの答案をご覧になればおわかりになるかと存じます。わたくしがどうしても申し上げたいのは、さきほど哈大人が仰った、山西の民風は重商の風ゆえに永遠に恢復できぬほどに腐敗しているということですよ。わたくしは愚か者ではございますが、このことば

かりは見過ごすわけには参りません」

「きさま——」

哈芬は激怒したが胡沅浦は続けるよう促した。

「第一に、天下には士農工商の四つの職業がございます。聖人は、農なくんば穩かならず、商なくんば富まずとは言っていますが、重商の風が民風を腐敗させるとは言っておりません。ですから大人のお言葉は聖人の言葉ではないことがわかります。第二に、わが中国は土地が広く物が豊富にございます。南方と北方では物産が異なり、商人が物の売買をせねば、物品は南北を流通することができず、物はその用を尽くすことができず、民はその利を得ることができません。民に利がなければ富まず、民が富まなければ、国に税は入りません。国に税が入らぬということは、兵が強くないということです。兵が強くないことは、天下の危機を意味します。第三に、立国の本は賦税にあります。全国の賦税は農がその七割を占め、商はその三割を占めております。そして全国の商人のうち、山西一省で三分の一を占めているのでございます。商人が商売に励み納税することは、国力を強めるための根本をなす大事です。まさか哈大人は山西商人がみな商売をやめ、国家に納税しない方がよいと仰っているわけではありま

すまい？」

「き、きさま、生意気な！」

野次馬たちが再び騒ぎ始めた。

「黙れ！」